

伝説のロックバンド **QUEEN** は 1970 年にイギリスで生まれ、1985 年 ボブ・ゲルドフの呼び掛けで世界中のミュージシャンが集まったライブエイドでのパフォーマンスをピークに、1991 年、ボーカルのフレディ・マーキュリーが亡くなるまでヒットを飛ばしまくった。それらの曲は元々クラシックで育ったフレディの音楽性に強く左右されている。バレエ音楽が好きだったという彼は 8 分の 6 のリズムを多用したり、ロックらしからぬオンビートからテクノポップへの移行を遂げたりと、その外のジャンルも貪欲に取り入れている。バンドは瞬く間に人生を駆け抜けたフレディの存在無しには語れない。

かけ離れたヴォイステクニックと伸びのあるハイトーンで一世を風靡したフレディのいた **QUEEN**。彼らのナンバーから特に良く知られた 4 曲を合唱で歌うことにした。曲順はリリースされた順に「愛にすべてを」から「伝説のチャンピオン」までの 3 曲を、そして一時期フレディが他のメンバーと不仲であったと言われたとき彼がソロリリースし、彼の没後にメンバーが映像共演して皮肉にも日本でも大ヒットとなった「ボーン・トゥ・ラヴ・ユー」。

クラシカルな合唱演奏会でロックを演奏するにはやや恥じらいがあり冒険でもあるが、多重録音を駆使した **QUEEN** のヒット曲はホワイトゴスペルの要素を大いに含んでいてコーラスで歌うには持ってこいのジャンルと言える。また、普段音を立ててはいけないといわれる山台も、使い方によっては、効果的な楽器に早変わりするのはと、ステージ上のタブーに挑戦する面白味もある。

そんな、いつもの合唱という視点からちょっと逃避して、今回のステージを楽しんで頂けたなら、ノリがいまひとつ…、かもしれない私達も歌った甲斐があったというものである。

1. 愛にすべてを **SOMEBODY TO LOVE**

ホワイトゴスペルのサウンドを 8 分の 6 のビートに乗せたクイーン初期の作品。既に名声を得ていた彼らが満たされず愛に飢え求める様が、繰り返す歌詞に乗って訴えかけられる。

2. ウィ・ウィル・ロック・ユー **WE WILL ROCK YOU**

音楽の原点とも言うべき極限のシンプルを追求した最も知られたクイーン作品。フレディの作曲が多い中、リードギターのブライアン・メイの作詞作曲であることも興味深い。既にこの頃からラップの要素を取り入れており、彼らの先見の明がうかがえる作品。

3. 伝説のチャンピオン **WE ARE THE CHAMPIONS**

「愛にすべてを」と同じく 8 分の 6 拍子のバラード。フレディがバレエ音楽に興味を持っていた所以であろうか。しかし力強い 2 ビートに感じられる盛り上がりは今でもスポーツ大会のテーマ曲などでしばしば聴かれる。

4. ボーン・トゥ・ラヴ・ユー **I WAS BORN TO LOVE YOU**

フレディのソロアルバムに収録されていたラヴソングを彼の死後メンバーがバックを録り直して彼の映像と共に蘇った作品。ポップでテクノやラテンリズムが入り混じった、しかし真正銘の 8 ビートロックになっているのが不思議で素晴らしい。